

江戸川乱歩・作 人間椅子 より抜粋

お話を、前に戻して、私の椅子が、ホテルのロウンジに置かれたことから、始めなければなりません。

椅子が着くと、一しきり、ホテルの主人達が、その坐り工合を見廻って行きましたが、あとは、ひっそりとして、物音一つ致しません。多分部屋には、誰もいないでしょう。でも、到着勿々、椅子から出ることなど、迎も恐ろしくて出来るものではありません。私は、非常に長い間（ただそんなに感じたのかも知れませんが）少しの物音も聞き洩すまいと、全神経を耳に集めて、じつとあたりの様子を伺って居りました。

そうして、暫くしますと、多分廊下の方からでしょう、コツコツと重苦しい登音が響いて来ました。それが、二三間向うまで近付くと、部屋に敷かれた絨氈の為に、殆ど聞きとれぬ程の低い音に代りまし

たが、間もなく、荒々しい男の鼻息が聞え、ハツと思う間に、西洋人らしい大きな身体が、私の膝の上に、ドサリと落ちてフカフカと二三度はずみました。私の太腿と、その男のガツシリした偉大な臀部とは、薄い鞣皮一枚を隔てて、曖昧を感じる程も密接しています。幅の広い彼の肩は、丁度私の胸の所へ凭れかかり、重い両手は、革を隔てて、私の手と重なり合っています。そして、男がシガーをくゆらししているのでしよう。男性的な、豊かな薫が、革の隙間を通して漾って参ります。

奥様、仮にあなたが、私の位置にあるものとして、其場の様子を想像してごらんなさいませ。それは、まあ何という、不思議千万な情景でございましょう。私はもう、余りの恐ろしさに、椅子の中の暗闇で、堅く堅く身を縮めて、わきの下からは、冷い汗をタラタラ流しながら、思考力もなにも失って了って、ただもう、ボンヤリしていたことばございます。

その男を手始めに、その日一日、私の膝の上には、色々な人が入り替り立替り、腰を下しました。そして、誰も、私がそこにいることを——彼等が柔いクッションだと信じ切っているものが、実は私とい

う人間の、血の通った太腿であるということ——少しも悟らなかつたのでございます。

まっ暗で、身動きも出来ない革張りの中の天地。それがまあどれ程、怪しくも魅力ある世界でございましょう。そこでは、人間というものが、日頃目で見ている、あの人間とは、全然別な不思議な生きものとして感ぜられます。彼等は声と、鼻息と、蹠音と、衣ずれの音と、そして、幾つかの丸々とした弾力に富む肉塊に過ぎないのでございます。私は、彼等の一人一人を、その容貌の代りに、肌触りによって識別することが出来ます。あるものは、デブデブと肥え太って、腐った肴のような感触を与えます。それとは正反対に、あるものは、コチコチに瘦せひからびて、骸骨のような感じが致します。その外、背骨の曲り方、肩胛骨の開き具合、腕の長さ、太腿の太さ、或は尾てい骨の長短など、それらの凡ての点を総合して見ますと、どんな似寄った背恰好の人でも、どこか違った所があります。人間というものは、容貌や指紋の外に、こうしたからだ全体の感触によっても、完全に識別することが出来るに相違ありません。

異性についても、同じことが申されます。普通の場合は、主として容貌の美醜によって、それを批判するのでありますが、この椅子の中の世界では、そんなものは、まるで問題外なのでございます。そこには、まる裸の肉体と、声音と、匂とがあるばかりでございます。

入力：砂場清隆

校正：湖山ルル

2016年1月1日作成 2016年11月12日修正

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。